

[同志社女子大学]

音の記憶 —永遠の愛校心を求めて—

川添 麻衣子 同志社女子大学広報部広報室広報課広報係長

はじめに

本学の授業開始・終了のチャイムには、2012年度春学期から、「同志社カレッジソング (Doshisha College Song)」と「同志社女子大学歌」を使用している。授業期間中は毎日1講時から5講時まで耳にするため、学生だけでなく教職員も非常に親しみを持っている。このチャイムが導入された目的と経緯、制作のプロセスについてご紹介したい。

1 導入の目的と経緯

大学歌等をチャイムに導入した一番の目的は、学生たちが本学学生としての自覚と誇りを

持つて大学生活を送り、本学に愛着を持ってもらうことである。本学では2006年頃から本格的にブランド構築に取り組み、建学の精神・教育理念をベースとした〈Spirit〉や〈Mission〉策定ののち、継続的にブランド管理に取り組むための委員会が発足していた。この委員会で具体的なアクションプランの方策が決定し、2010年1月に採択された9つのアクションプランの一つが「カレッジソングチャイム」であった。

2 「同志社カレッジソング」と「同志社女子大学歌」

チャイムの制作過程に触れる前に、使用している「同志社カレッジソング」と「同志社女子大学歌」について紹介しておきたい。

「同志社カレッジソング」は、1908年に誕生した学校法人同志社の校歌である。1番の歌詞の冒頭が「One Purpose, Doshisha」であることから、同志社関係者はこの校歌のことを、愛着を持って「カレソン」や「ワンパーパス」と呼び、在学生から卒業生まで、様々なイベントで集う際には必ず歌われる。ただ、本学の学生生活の中では、他

の法人内諸学校に比べるとやや触れる機会が少ない印象があった。一方の「同志社女子大学歌」は、2001年に本学創立125周年記念事業の一環として制作されたものである。1986年に開校した京田辺キャンパスの緑豊かな風景描写も含まれた、あたたかみのあるメロディーが特徴的である。チャイム導入前の時点ではまだ歴史が浅く、卒業生に対しても認知拡大が必要な状況であった。

3 チャイムの制作過程

これら2つの楽曲をチャイムとして使用するにあたり、計画当初はトーンチャイム部の演奏による録音を想定していた。しかし、チャイムとして使用するにふさわしい編曲が必要であり、学芸学部音楽学科音楽文化専攻内に当時間開設されていたコンピュータ音楽コースの学生2名が制作に携わることとなった。担当した学生たちは制作にあたって、原曲をシンプルにわかりやすい音にまとめる作業に苦勞したことや、テンポ感にこだわったことを、当時掲載された新聞記事の取材に答えている。

おわりに

「同志社カレッジソング」や「同志社女子大学歌」をチャイムに導入して丸10年、これらの楽曲について、本学関係者であれば卒業生も含めて知らない人はいないであろう。入学式や卒業式等の式典では必ず斉唱し、入学時にはCDとともに楽譜・歌詞を掲載したクリアファイルの配付も行っている。

筆者が昨年度末の卒業式を間近に控えた時期にキャンパス内を歩いていた時、横を通り過ぎた卒業年次生たちが「この大学歌のチャイムを聞くのもあと何回だろう」と、寂しそうに話している声が聞こえてきたことがあった。その年度の卒業生に配付したメッセージ集『未来をみつめるあなたへ』には、ARマーカーを読み込むと立体的な教室の風景が浮かび上がると同時に、チャイムの音が聞こえるしかけを導入した。チャイムの音を聞くことで学生時代の様々な記憶が呼び起こされ、そのたびに本学や後輩たちに思いを巡らせてもらえたらと願ってやまない。

[フェリス女学院大学]

キャンパスの原風景としてのチャイム

秋岡 陽 学校法人フェリス女学院学院長

1 耳をすませば

― キャンパスの音環境

キャンパスにおける環境の取り組みというと、エネルギー資源や生態系に関わるエコ活動や、ユニバーサルデザインやバリアフリーの観点からの点検・整備の取り組みがまず思い浮かぶ。

フェリス女学院大学でもそうした取り組みが積極的に行われてきた。そしてもうひとつ、一見地味だが、キャンパスの「音環境」の整備も見逃せない。

通学途中、街の騒音や交通機関でのアナウンスの洪水にさらされてたどりついたキャンパス。耳をすませば、そこには鳥が鳴き、木々が風でそよぐ音環境がある。それはキャンパスの音の原

風景として一生心に刻まれるものでもある。

そうした音環境の保全や、学内チャイム音の整備も、キャンパスライフを豊かにする大切な要素だ。

2 礼拝への招きのチャイム

フェリス女学院大学は1980年代に、新たに延伸された相鉄いずみ野線の緑園都市駅の近く、ゆるやかな坂をのぼった小高い丘の上に、新キャンパスを開設した。当時は周辺に建物も少なく、駅を降りて見上げた丘の上に、建学の精神のシンボルともいえる礼拝堂が見えた。

この礼拝堂は鐘楼をもち、学期中毎日行われる礼拝の時刻になると、鐘の音が礼拝の開始を知らせた。鐘と合わせて、放送設備を使ったチャイム音で賛美歌の旋律も流れた。賛美歌は《ガリラヤの風》。フェリス女学院で長く賛美歌学の授業を担当した由木康の作詞で知られる賛美歌だ。

イエスが宣教を始めたガリラヤの丘を緑園都市の丘にみたてた選曲だったのだろうか。また、チャイムは旋律だけでなく、愛と平和に満ちた神の国の実現を今日も祈り続ける、という歌詞内容がキャンパス共同体の耳と心に刻まれ

ることになった。

3 授業開始・終了時のチャイム

賛美歌の旋律がチャイムで使われるのは礼拝の始まりを告げるときだけ。その他の、授業の開始・終了のチャイムでは、『フェリス女学院校歌』の旋律が流れる。

1870年創立のフェリス女学院では、長い歴史のなかで、複数の校歌やスクールソングが歌われた。そのなかで、現在チャイムで使われているのは、戦後まもなくに作られたもの。戦前はひとつの「女学校」だったフェリスも、戦後の学制改革で中等・高等教育にわたる複数の学校をかかえる学院になる。そうしたなか、学院全体で一緒に歌える新時代の校歌がほしい、という願いがおこってきた。

この願いが、1950年に実現する。折しも学院の創立80周年。学院にとって希望の再出発の時機に新校歌制定の夢が実現した。作曲は、当時専門学校の音楽科の教員だった新進気鋭の作曲家、團伊玖磨が担当。歌詞は学内関係者から公募。選ばれたのは当時中学校・高等学校の国語の教員だった英康子の詞だった。

4 校歌によるアイデンティティ醸成

この校歌も作られてすでに70余年。学院全体で一緒に歌うために作られた歌は、今や、世代をこえて歌われる歌になった。また、入学式・卒業式等でのみ歌うのではなく、毎日のチャイムとして心に刻まれることで、学校のアイデンティティや学生の帰属意識の醸成にも貢献してきた。

久しぶりに学校を訪ねた卒業生も、このチャイム音を耳にすると、一瞬で学生時代の記憶がよみがえるという。懐かしい音の原風景。ただひとつ悩ましいのは、昨今の音響技術の水準からすると、いくぶん古ぼけた音になったチャイムの音を、新しくすることが難しくなってしまったことだろうか。



[写真] 緑園キャンパスチャベルカリヨン

[専修大学]

洗練された空間を求めて 「専修大学校歌」のチャイム制作

近藤 裕子 石巻専修大学人間学部教授

1 耳に優しい音色

今日も学生たちはさりげないチャイムの音色に包まれて思いの一日を過ごしているのだろうか。

鳴ったことに気づかないかもしれない。それでいい。早く鳴れと念じているかもしれない。それもいい。

毎時間しっかりと確認するよ
うな音色では疲れてしまうだろう。理想は「あら今鳴ったかな？」という程度、ベタついてはいけない。そのために私ができることは、余計なものを取り除き、余白を多くすることだった。

専修大学の校歌は高野辰之作詞、信時潔作曲という錚々たる面々による作品である。信時

潔には、私の作曲の恩師、高田三郎も師事していた。

このような格式の高い作品をチャイムにという斬新な企画は、2020年1月に突然持ち込まれた。

2 柔らかい音楽

それまでにも、私は入学式や卒業式に校歌を歌ったり、学生たちに歌唱指導をしたりしたことがあった。しかしその内容の素晴らしさは理解できても、完璧に歌うにはなかなか難しい曲である。

伝統ある校歌に多く見られる行進曲風の「縦」に刻むリズムの伴奏が勇ましくて良いが、チャイム用に編曲すると重くなってしまふ。親しみがあり覚えやすい反面、停滞してしまうのだ。

音楽にはこの「縦」に刻む伴奏に対して、「横」に流れるメロディーがある。

私は、伴奏にも「横」に流れる編曲を施して、チャイムが鳴り終わった後もその空間の広がりを感じられる音楽にしたいと考えた。

依頼を受けた時、最初に浮かんだのはハープの音色だっ

た。アルペジオと呼ばれる奏法で、実際のハープのように低い音から高い音へだんだんと「横」に音を重ねていき、その余韻が残ると、必要な和音を持続することができる。その結果、とても繊細で美しい響きが得られるのである。

今回はピアノとハープ2つの音色で制作した。ピアノは多くの学生が聞いたことのある音色なので馴染みがあるのに対して、ハープはあまり聞いたことがないかもしれない。しかし美しい音色であることを知っている学生も多いことだろう。この夢見るようなハープの音色を使えば、ほんの少し非日常も味わえるのではないかと思った。録音してみるとやはり柔らかい音色のハープがとても美しい。音域も人の声と同じくらいの高さに編曲している。

もう一つ付け加えるとすれば、調を一つ上げたことだろう。へ長調からト長調になり軽さが出た。b系から#系に変化すると軽さが際立つようになる。またより女声の音域に近くなり、聞く人の耳に優しく届くと考えた。

この「縦」「横」2つの流れを意識した編曲と、調を変えたことにより、羽のように軽い校歌のチャイムが完成した。新しいチャイムになって3年。今のところ問題なく使用されているようで安堵している。

3 音楽の余白を意識する

東京下町出身の私は、都心部に出るたびに電車の発車ベル音楽に驚かされる。

これは私だけかもしれないが、都内は駅間が短いので、数分おきに聞いていると心がざわつく。各駅で重い荷物を少しずつ背負っていくような疲労感が伴う。多分音楽が饒舌になっているからだろう。

一昨年、在外研究で滞在したイタリアは、駅に全く音楽がなかった。多くの音楽家を輩出した国とは思えない素っ気なさだ。しかし不必要な音楽のない世界で人々は独創的な空間を数多く生み出している。そしてそれらがとても洗練されていて刺激的だった。

「あら今鳴ったかな？」

今日もさらりと受け入れられるチャイムの音色をまとい、学生たちは新たな創造の世界に飛び込んでいくことだろう。Buona giornata!

良い一日を！